

宮古圏域発達支援セミナー

陸中ビルにおいて、「地域で支える」をテーマに宮古圏域発達支援セミナーが開催されました。北海道大学大学院教育学研究院の安達潤教授、東京女子大学の前川あさ美先生特認教授(臨床心理士・臨床発達心理士)による講話と、宮古圏域の保育所や小・中学校、放課後等デイサービスや成人施設での取り組みが紹介されました。日々の丁寧な子どもの見とりや、子どもの実態に合わせた支援の工夫の大切さを共有する時間となりました。

今回は、前川あさ美先生からお話いただいた、「**家族を支える-支援者にできること-**」についてご紹介します。支援活動の主人公は子どもであり、保護者であることを忘れずに、活動を行っていききたいものです。

どうして私の子どもだったのだろうか

- ・自分を強く責める、悔しさを体験
- ・戸惑い傷ついた心が内や外に向かったりして傷を広める



受け入れられないのは、子どもに愛情がないからではない、親だから・・・。

- ・「受け入れる」「受け入れられない」の二者択一ではなく、親の揺れる心に寄り添うことが大切。

この子を産んでよかったのだろうか

- ・社会の役に立つ訳でもない、たくさんの人に迷惑をかけるだろう・・・



・この世に何かを提供するだけでなく、この世から感動や感情を受け取ることによって、私たちの存在価値は実現できる。

私に育てることができるだろうか

- ・かわいいと思えなくなってしまう
- ・これからずっと、いろんな人に頭を下げて生きていくのかしら・・・



- ・「困った子」とみなされている子どもは、「困っている体験」をしている。「困った親」も同様。「困っている体験」に耳を傾けることが大切。
- ・目の前の子どもを教師とし、保護者と一緒に子どもから学びながら、個別の支援のありかたを模索する。
- ・「私たちに合わせる」支援だけではなく、「彼らに合わせる」支援も必要。

専門家とはどんなふうに

関わればいいのか

- ・障害というラベルを貼られてしまうのが怖いなあ
- ・秘密を守ってくれるのだろうか



- ・「診断」の「断」は「断面」の断であって「断定」の断ではない。診断以外にも、子どもには多数の側面がある。
- ・秘密にしたいという気持ちを理解し、尊重した上で、情報共有のメリットとデメリットを保護者と確認する。

普通の子にはどうしたら なれるのだろうか

- ・少しでも早く、普通にしてあげたい・・・



- ・みんなと同じでないことは「違い」であって「間違い」ではない。
- ・子どもの「あるがままの姿」を見失なわないことも支援の一部。
- ・子どもが必要とする変化は「適応」への変化。必ずしも「普通」への変化ではない。
- ・ゆっくり起こる変化こそ、子どもの内側から起こる本物の変化。

この子は人を疑うことを

知らないのだけれど大丈夫だろうか

- ・小さい頃はよかったけれど、社会に出たらどうなるのだろうか・・・



- ・信頼できる人を見分けるスキルよりも、自分を守るスキルを子どもたちにどのように教えていくかが支援活動の大事な目標。

